俺の彼女は〇〇〇〇〇〇

吾仁守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の彼女は〇〇〇〇〇〇

【Ｎコード】

Ｎ８７２９Ｋ

【作者名】

吾仁守

【あらすじ】

学校で１番かわいいと言われてる新藤里枝美（しんどうりえみ）と付き合うことになった俺、渚雅夜（なぎさまさや）。

しかし、彼女にはとてもスゴイ秘密があった。

かわいい彼女

どうも皆さんこんにちは、俺の名前は渚雅夜。
普通の高校生です。
実は俺には彼女がいます。
彼女の名前は新藤里枝美。
一見普通の女の子に見える彼女ですが、実はスゴイ秘密があったんです。
そんな彼女と俺のエピソードです。

ある日のことだった。
「雅夜、私と付き合って。」
「里枝美、学校で1番かわいいと言われてるお前の彼氏は、俺なんかでいいのか？」
「雅夜だから彼氏になってほしいのっ。」
「そうか、それならよろしくな。」
「やったー、よろしくね。」

こうして、俺と里枝美は付き合うことになった。
このときの俺はまだ何も知らなかった。
彼女のとてもスゴイ秘密のことを・・・・・。

不思議な彼女

「雅夜～、一緒に帰ろっ。」
「里枝美か、いいぜ。帰ろうぜ。」
「どうせならさぁ～、どっかに遊びに行こうよ。」
「あぁ、いいぜ。どこに行きたい？」
「私、ゲーセンに行きたいなぁー。」
「わかった、じゃあゲーセンに行こうぜっ。」

ゲーセンに着いた。
「里枝美、どんなゲームがしたい？」
「やっぱり、格ゲーがしたい。」
「意外だな。格ゲーでいいのか？」
「うん。格ゲーがいいの。」
（ピッピッピッピッ）
「里枝美、お前かなり強いな。」
「雅夜が弱いだけじゃないかな？」
「俺は自分でも、かなり強いほうだと思うんだけど。ていうか里枝美は、いつから格ゲーやってるの？」
「小学1年生からだよ。」
「里枝美って不思議だな。女の子が小さい頃から格ゲーだなんて。」
「そ、そうかなぁ～？」
「ま、別にいいけどな。そろそろ帰るか？」
「うん、帰ろう。」

俺は彼女の意外な秘密に少しずつ近づいていっているのであった。
しかし、そのことには、まだ気づいていなかった。

いや、気づくことができなかったのであった……。

真夏の彼女

「明日から、やっと夏休みだな。里枝美、どこか行きたいとことかあるか？」
「私は雅夜とだったら、どこでもいいよ☆」
「そうか、なら明日は海に泳ぎにでも行くか？」
「えっ！！う、海？」
「そうだ、海だ。海は嫌なのか？」
「う、ううん。海行きたい！」
こうして俺と里枝美は海に行くことになった。

［海］
「今日は晴れて良かったな。」
「そ、そうだね。」
「里枝美、あんまり嬉しそうじゃないな。」
「ううん、嬉しいよ。」
「そうか、じゃあ泳ごうか。」
「う、うん。」
〔里枝美の水着姿、かわいい！でもなんか変だ……。ま、いっか（笑）。〕

泳ぎ疲れた俺は、電車の中でぐっすりと眠っていた。
『雅夜～。』
『里枝美、どうしたんだ？』
『実はね、私、○○○○○○なの。』

「えぇーっ！！！」
「ど、どうしたの？」
「なんだ。夢か～。」
「雅夜が急に大声出すから、ビックリしたよぉ～。どんな夢を見たの？」
「と、とっても怖い夢だ……。」

この日の夜、俺は寝ることができなかった……。

パワフルな彼女

楽しい夏休みが終わった。

「里枝美、今日の体育の授業は何をするんだ？」
「今日はソフトボールをやるよっ。」
「じゃあ、俺もソフトボールにしようかな。」
「やった～っ。雅夜とソフトボールができるっ☆」

体育の授業が始まった。
『プレイボール！』
〔1番は里枝美か。ちゃんと打てるかな～？〕
（カキーン）
『ホ、ホームラン！』
「へぇ～、里枝美はホームランかぁ～……？えぇーっ！！いきなり場外ホームラン！？」
「雅夜～、やったよ！ホームランだよっ。」
「里枝美、お前の体のどこにそんな力があるんだ？」
「ひみつぅ～。打ててしまったんだからしょうがないよ。」
「俺でもあんなところまで飛ばせないぞっ。」
「そうかなぁ～？あっ、次雅夜の番だよ。」
「俺も里枝美に負けないように打たないとな。」
「雅夜、頑張って～。」
（カキーン）

この試合は里枝美の大活躍によって圧勝だった。

家庭的な彼女

（プルルル～～）
「はい、もしもし渚ですけど～。」
「もしもし雅夜ぁ～、里枝美だけど、今から私の家に来てっ。」
「いいけどー。なんか急だな。もう晩御飯の時間だぞ。」
「今日は私が雅夜に晩御飯を作ってあげる。だから、私の家に来てって言ってるのっ。」
「ホントかっ！じゃあ、今から急いで行くっ。」
「待ってるから～☆」

（ピーンポーン）
（ガチャッ）
「雅夜、いらっしゃーい。」
「よっ、今日はご馳走になるぜ。」
「今日は、雅夜のために腕によりをかけて作ったよ。」
「す、すっげぇー。これ全部里枝美が作ったのか！？」
「あったりまえじゃーん。こんなの朝飯前だよーっ。」
「もう晩御飯だけどな（笑）。里枝美にこんな才能があるなんて知らなかった。」
「そんなに褒められたら照れるよ～。」
「マジでうめぇーよ。」
「雅夜、ありがとっ。」
「俺のほうこそ、今日はありがとな。またご馳走してくれよな。」
「うん。雅夜のためならいくらでも作るよっ（笑）」
「ご馳走さま。じゃあまたな。」
「うん、またね～。」

幼なじみと彼女

「やっほ～☆雅夜、遊びに来たよぉ～。」
「来たか、里枝美。」
「雅夜、今日はどこに行く？」
「今日は一緒に買い物にでも行くか。」
「やったぁー、雅夜と買い物だっ。」
「よし、じゃあ行くか。」

「雅夜に似合いそうな服だね。」
「そうかなぁ～、俺にはちょっと派手すぎるような気がするぞ。」
「かなり似合ってるよっ。」
「じゃあ、この服を買うよ。」
「今度遊びに行くときに着て来てねっ。」
「おう、わかった。」
「あぁ～っ、雅夜～っ。」
「うわぁっ。」
（バタッ）
「いたたたた。いきなりなんだよ～。」
「雅夜、久しぶりっ。」
「ひ、ひかり。どうしてお前がここにいるんだ！？」
「どうしてって、引っ越してきたんだよぉ～。」
「雅夜、この子だれなの？」
「里枝美、この子はひかり、俺の幼なじみだ。」
「ひかりで～す。よろしくっ☆」
「里枝美です。こちらこそ、よろしく。」
「ところで雅夜とは、どういう関係なの？」

「えっ、雅夜と私は付き合ってるの。」
「へ、へぇ〜、そうなんだぁ〜。あっ、そういえば用事があったんだ。それじゃあまたね。」
「お、おう。じゃあまたな。」
「まさか、あのひかりって子、昔雅夜のことが好きだったりしてね。」
「まさかな、そんなことありえねーよ。」
「そうなのかなぁ〜？今も好きなのかもしれないよ？」
「そんなことはないだろう。」
「そうだといいんだけどね……。それじゃあ、帰ろうか。」
「そうだな、帰るか。」

幼なじみ再び

「雅夜、今日の帰りは喫茶店に行こう～。」
「いいぜ、里枝美。」
「私、喫茶店でケーキが食べたい！」
「よしっ、じゃあ行くぞっ。」
「おぉ～！」

「雅夜～、雅夜は何のケーキを食べる？」
「俺はショートケーキだな。」
「ケーキの王道だね。私は……モンブランにしよう～。」
「よし、じゃあ決まりだな。」
「お客様、注文はお決まりでしょうか？」
「えーっと、ショートケー……、ってひかり！？」
「ま、雅夜！！それに里枝美さん！？」
「ひかり、お前ここでバイトしてたのか？」
「そうだよ。雅夜は、今日里枝美さんとデート？」
「おう、そうだ。」
「そ、そうなんだ……。それで注文は？」
「ショートケーキとモンブラン。」
「かしこまりました。しばらくお待ちください。」
「ひかりちゃんのウェイトレス姿、かわいかったね。」
「そ、そうかなぁ～。」
「雅夜、ちょっと見とれてたよ。浮気はダメだよっ。」
「浮気なんてしないよ。」
「ならいいんだけどね……。」
「お前は心配しなくても大丈夫だよっ。」

「雅夜……、ありがとっ☆」
「おう。」

俺たちはケーキを食べたあと、店を出た。
そして、それぞれの家へと帰った。

彼女ＶＳ幼なじみ

「雅夜、一緒に帰ろう～。」
「里枝美か。悪い、今日は放課後残って図書委員の仕事をして帰らないといけないんだ。だから、先に帰っててくれ。」
「わかった。先に帰っとくね。」
「ホントにごめんな。」
「ううん、いいよ。気にしないで……。じゃあ、またね。」
「おう、またな。」

それから、里枝美はどこかで少し遊んで帰ることにした。
「雅夜と一緒に帰りたかったなぁ～……。」
「あなたは、……里枝美さん！？」
「あっ、ひかりさん。」
「里枝美さん、今日雅夜は一緒じゃないの？」
「今日は雅夜とは一緒に帰れなかったの。」
「へぇ～、そうなんだ。もしかして、雅夜は里枝美さんに飽きちゃったんじゃない？だから、一緒に帰らなかったんだよ。」
「なんでそんなことを言うの！？そんなことあるわけないじゃん。」
「なんでそう言い切れるのかなぁ～？」
「雅夜が私のことを好きだからに決まってるじゃん。ていうか、ひかりさんは、どうして私にひどいことを言うの？」
「私も……。」
「私も？続きを言ってくれないと分かんない。」
「私も雅夜のことが好きだからよっ！！」

譲れない想い

「い、今なんて言ったの？」
「……雅夜のことが好きって言ったのよっ！！……なんで？なんで雅夜は、あなたを選んだのっ？」
「それは……、雅夜が私のことを好きだからに決まってるじゃない。」
「ウソだっ！」
「嘘なんかじゃないよ。」
「ウソだっ、ウソだっ。雅夜は昔、私と結婚するって約束してくれたんだから。」

あれは私が小学3年生のときだった。
「俺、ひかりちゃんと結婚するっ。」
「私と？なんで？」
「ひかりちゃん、優しいもん。俺、絶対に結婚するよ。」
「雅夜君……、約束だよ。」
「うん。約束だよ。」

だけど、雅夜は小学4年生になるときに転校した。

「雅夜が転校してから、私はずっと雅夜のことが忘れられなかった……。この気持ちがあなたに分かる！？」

「……。」
「分かるわけがないわよねっ！？雅夜のことを、ずっと忘れられなかった。やっと雅夜に会えたのに……。それなのに雅夜はあなたと付き合ってるのよっ！私は、こんなにも雅夜のことが好きなのに……。それなのになんで……。」
「ひかり……。」
「……まっ、雅夜！？！？」

過去を思い出して……

「雅夜、……どうしてここにいるの？」
「どうしてって、帰ろうとしてたら、ひかりと里枝美が話してるのが見えて、気になったから来たんだよ。」
「そ、そうなの……。じゃあ、さっさと帰りなさいよ。」
「今の話を聞いてたのに、帰れるわけねぇーだろ！！」
「雅夜……。」
「俺、ひかりとの約束をすっかり忘れてた。最低だよな……、俺。なのに、ひかりは俺との約束を今でも覚えててくれた……。」
「忘れるわけがないじゃない！私、雅夜のことが大好きなんだから！！」
「ひかり……。」
「雅夜……、雅夜は私のことが好きなのよね？」
「里枝美……。俺、何がなんなのかわかんねぇよ！！！」
（タッタッタッタ……）
「雅夜っ、待ってっ……。」
「里枝美さん、あなたから雅夜を奪い返してみせる。絶対にっ！」

雅夜の答え

（ガチャッ）
「雅夜お帰り～。」
「ただいま、姉ちゃん。……今日は晩ご飯いらない。」
「雅夜、何かあったの？」
「何もないよ……。」
「……嘘ね。雅夜がそういう時は何かあった時だから。私でよかったら、相談にのるよ。」
「実は……。」
俺は、今までの事情を姉ちゃんに話した。
「ふ～ん、なるほどね。」
「俺、……どうすればいいのかわからない。」
「何も悩む必要はないだろ。雅夜は今、誰のことが好きなの？」
「俺は……、里枝美のことが好きだ！」
「じゃあ、里枝美ちゃんのことを大事にしなさい。」
「でも、ひかりが……。」
「過去は過去、今は今でしょ。」
「……そうだな。ありがとう、姉ちゃん。」
「別にいいわよ。明日、しっかりと決めてきなさいよっ。」
「おうっ、明日しっかりと決めてくる。」

答えの結果

（プルルル～）
（ガチャッ）
「はい、もしもし～。」
「もしもし、雅夜だけど……。」
「あ、雅夜っ。……私に何のよう？」
「ひかり、明日お前に言いたいことがある。だから、明日の朝、俺の家の近くの公園に来てくれ。」
「電話じゃ言えないことなの？」
「うん。……電話では言えないことだ。」
「わかった。……じゃあ、また明日ね。」
「じゃあ……また明日。」

翌日の朝。
「おはよう、雅夜。」
「おはよう、ひかり。」
（……。）
少しの間沈黙が流れた。
そして俺は、俺の答えをひかりに伝えることを決心した。
「ひかりっ。」
「なっ、何？」
「俺は……。」
「何なのよ、早く言いなさいよ。」
「俺は、……お前との約束を守れない。」
「……何で？」
「今、俺が好きなのは……里枝美だからだ。」
「何で私じゃなくて、里枝美ちゃんを選んだの？」

「なんでなんだろうな？俺はなぜか里枝美に惹かれてしまったんだ。」
「それはかわいいからでしょ！？」
「違うっ！もちろんかわいいとは思う。でも、理由はそれだけじゃないんだ。なんでか知らないけど、里枝美と一緒にいると落ちつくんだ。」
「……私は、里枝美ちゃんにはかなわないのかなぁ？」
「ひかりだって十分モテるよ、俺みたいなダメなやつよりもマシな男が見つかるよ。」
「私は雅夜が良かったの！！」
「ひかり……。」
「私には……、雅夜しかいないの。……絶対に諦めないんだからね！！」
（タッタッタッタッ……。）
ひかりは全速力で公園から出て行った。

悩む里枝美

「里枝美、おはよう。」
「雅夜……、おはよう。」
「あのさぁ、この前のことなんだけど……。」
「私も、この前のことについて話したかったの。」
「じゃあ、里枝美から話してくれ。」
「私たち……、このまま付き合っててもいいのかなぁ……？」
「……どうして？」
「だって、私はひかりちゃんから雅夜を奪ったようなもんなんだよ！！」
「……そんなの関係ないじゃん。」
「えっ……。」
「俺と今付き合ってんのは里枝美だろっ！！」
「でも……。」
「俺はお前のことが好きだ。だから、お前が悩む必要はないんだ。」
「……ありがとう。私、家でずっと悩んでた。一晩中眠れないくらい悩んでた。」
「ごめんな、つらい思いをさせて。」
「ううん、もう平気だよっ。」
「これからもよろしくな。」
「こちらこそ、よろしくねっ。」

それでもまだ……

〔何で私が雅夜のことを諦めなきゃいけないのよ！？〕
心の底から雅夜を愛していた。
なのに雅夜は振り向いてはくれなかった。
ひかりにとって、雅夜は身近な存在だった。
なのに、雅夜は遠くへ行ってしまった。
〔こうなったら、里枝美ちゃんの秘密をつかんで、雅夜を奪い取るしかないわ。あんなにかわいいんだから、秘密の１つや２つあるはずよ。〕
ひかりは里枝美の秘密を探ることを決心した。
それがどんな結果になろうとも関係ない。
ただ雅夜が自分のことだけを見ていてくれる。
それだけでいいのだ。
「絶対に秘密をつかんでやるんだからねっ！」

ひかりはまだ気づいていなかった。
いや、気づけなかったのだ。
自分が、里枝美のスゴイ秘密を知ってしまうことを……。

秘密探し

里枝美の秘密を見つけるために、ひかりは里枝美のあとをつけていった。
〔あんなにかわいいんだから、浮気とかしてるはずよ。〕
そう思いながら、ひかりは秘密を探っていた。

3時間以上里枝美のあとをつけていったが、里枝美はいたって普通の女の子と同じような行動しかしなかった。
〔こんなに長い間あとをつけているのに、何もないなんておかしい。〕
ひかりは、今日は諦めることにした。
「今日は無駄な時間を過ごしてしまったわ。」
また明日にするしかない。
そう決心したひかりは、家に帰って明日に備えて寝ることにした。

翌日。
ひかりは、昨日は昼間に里枝美のあとをつけていったから、今日は夕方、里枝美のあとをつけていこうと決めた。
〔今日こそ秘密を見つけてやるっ。〕
そう自分に言い聞かせた。

里枝美をつけていって2時間が経過した頃に、里枝美は家に帰って

いった。
「ここが里枝美さんの家なんだ。」
ひかりは少しの間、里枝美の家の近くで張り込むことにした。

秘密を知ったひかり

「ただいま、お母さん。」
「お帰り、里枝美。今日はどこに行ってたの？」
「今日はそこらへんを散歩してただけだよ。」
「彼氏とデートはしないの？」
「学校の日は毎日デートをしてるようなもんだよ。」
「そうなの。それならいいんだけど。そういえば、あのことは話してないんでしょ？」
「うん、話してないよ……。」
「あなたが〇〇〇〇〇だなんて彼氏が知ったら……。」
「いつか、この秘密がバレてしまうかもしれない……、でも私は少しでも多く雅夜と楽しい時間を過ごしたい。」
「そうよね。それなら頑張るのよ。」
「うん。ありがとう、お母さん。」

「まさか、里枝美さんが〇〇〇〇〇だったなんて……、これはすごい秘密だわ！！」
里枝美の秘密を知ったひかりだが、少し考えごとをしていた。
〔もし私が、このことを雅夜に話したとして、雅夜は信じてくれるのかしら？もし信じてもらえなかったら……〕

導き出した答え

ひかりは家に帰ってからずっと考え事をしていた。
〔私はどうすればいいの？雅夜にこのことを伝えるべきなの？〕
ひかりは一晩中悩み続けた。

翌日
〔私が出す答えは、ただ１つ〕
１つの答えを導き出したひかりは、ある場所へと向かった。

（ピンポーン）
「はーい。」
（ガチャッ）
「こんな朝早くにごめんなさい。」
「ひかりちゃん！！……どうして私の家を知ってるの？」
「そんなことはどうでもいいの。それよりも大事な話があるから、ちょっとついて来て。」
「何かとても大事な話のようね。……わかったわ。」

答えの先には……

ひかりと里枝美は近くの公園まで行った。
「ひかりちゃん、話って何なのかしら？」
「……私、あなたの秘密を知ってしまったの。」
「秘密？何のことかしら？」
「とぼけないで！！」
「……。」
「私、聞いてしまったの。あなたとあなたのお母さんの会話を……。あなた、○○○○○○ってホントなの？」
「……。」
「答えてよっ！！」
「……そうよ。私は○○○○○よ。」
「どうしてあなたみたいな人が雅夜と付き合ってるのよ！？」
「それは……好きだから。」
「自分の立場を考えてよっ！あなたみたいな人は、雅夜と付き合っちゃダメなのよっ！」
「……。」
「あなたと雅夜が付き合ってると、雅夜が不幸になるだけなの。だから、雅夜と別れて。」
「……わかったわ。」
（タッタッタッタッ……）
里枝美はその場から駆け出していった。

悲しき決断

（ピンポーン）
「はーい。」
（ガチャッ）
「おはよう雅夜。」
「おう、里枝美か。こんな朝早くにどうしたんだ？」
「あのね、今日は雅夜に言いたいことがあって……。」
「言いたいこと？」
「うん。言いたいことってね……、私と別れてほしいってこと。」
「えっ！？」
「私と付き合ってたら、雅夜は不幸になるから。だから、別れてほしいの。」
「全然意味が分かんねぇーよ。急にどうしたんだよ？」
「これ以上は私に関わらないで。……お願いだから。」
（タッタッタッタッ……）
「おい、待てよ。里枝美ぃー……。どうしてなんだ？何がどうなってんのかわかんねぇよ。」

隠される真実

〔学校〕
「里枝美、おはよう。」
「雅夜、……おはよう。」
〔どうして里枝美は急に別れようなんて言い出したんだ？何か原因があるはずだ。〕

昼休みになった。
「里枝美、ちょっと話したいことがある。ついてきてくれ。」
「……わかったわ。」

〔屋上〕
「里枝美、……何で別れようなんて言い出したんだ？」
「……言えない。」
「理由を聞かないと、俺は納得がいかない。」
「理由なんてないよ。」
「理由がないのに別れようとか思わないだろ？」
「……理由なんて必要ないよ。」
「……別れようと思ったことに、ひかりは関わっているのか？」
「……ひかりちゃんは関係ないよ。全部私が決めたことだから。」
「……そうか。それを聞けただけでよかったよ。せっかくの昼休みなのに、時間を使ってごめんな。じゃあ、俺教室に戻るわ。」
「……雅夜！！」

「……何だ？」
「雅夜は悪くないよ、悪いのは……全部私なんだから！！」
「そんなことねぇーよ。里枝美が別れようと思ったことに、俺は少しでも関わってるんだからな。」
「雅夜、……ごめんね。」
「もう謝らないでくれ。胸が苦しくなっちまう。」
「……うん。」
「じゃあ、俺先に行くからな。」
「うん。」

（雅夜は悪くないんだよ。悪いのは私なんだから……。そう……全部私が悪いの。）

出逢い

俺と里枝美との出逢いは中学3年の時だった。
中学の時の俺は目立たない存在だった。
それに対して里枝美は、俺にはまぶしすぎる存在だった。
そんな里枝美の噂は、中学に入学した頃から聞いていた。
だけど、今まで直接見たことはなかった。
初めて里枝美を見た時に、一目惚れをした。
でも、俺には高嶺の花だと思った。
そんな里枝美が、俺に話しかけてくれた。

どうしてだろう?
里枝美と話していると、とても懐かしい感じがした。

里枝美は、毎日のように俺に話しかけてくれた。
それだけで俺の心は満たされていた。
そして俺は、里枝美と同じ高校に行くことを決めた。

俺は里枝美と同じ高校に合格した。
里枝美は俺と一緒に喜んでくれた。

高校1年の秋に里枝美に告白された。
もちろん俺の答えはOKだった。

どうして里枝美は俺のことを好きになったんだろう？
これだけは、今も謎だ。

真実を求めて

屋上での里枝美の態度は、明らかに何かを隠していると考えた雅夜。
そんな雅夜は、家で考えこんでいた。
〔里枝美は何かを隠している。とても重要な何かを……。そして、何らかの形でひかりが関わっている。〕
こう考えている雅夜だった。
そして、
〔ひかりに聞いてみるべきか？……だけど、ひかりは正直に話してくれるのか？〕
雅夜は、自分の心の中で葛藤を繰り返していた。
今までの信頼を崩されてしまい、何を信じればいいのか分からなくなってしまった雅夜。

（コンコン）
「雅夜っ、入るよー。」
（ガチャッ）
「姉ちゃん、……何しにきたんだ？」
「あんたが、また悩んでるんじゃないかと思ってね。話を聞きにきたのよ。」
「……姉ちゃんは何でもお見通しなんだな。」
「あんたは顔に出やすいんだよ。」
「そうなんかなぁ？」
「そうだよ。また相談にのってあげようか？」
「……いや、今回は自分で解決するよ。」
「大丈夫なのかい？」
「大丈夫かどうかって聞かれたら、わからないけど……。でも、自

分で解決しないと前に進めない気がするんだ。」
「……そっか、なら頑張りなよ！」
「おう、なんとか自分で答えを出すよ。」
「じゃあ、部屋に戻るわ。」
「ありがとな、姉ちゃん。」
「いいってことよ。……おやすみ、雅夜。」
（ガチャッ）

〔俺は自分自身で答えを出さないと、これ以上前には進めない。だけど、俺は誰を信じればいい？……イチかバチか勝負をしかけてみるか。〕

考えがまとまった雅夜は、明日何か勝負しかけることを決めた。
それがどんな結果になるかを知らずに……。

勝負の行方

翌日。
雅夜にとって、勝負の時がきた。
〔今日の行動が吉と出るか、凶と出るか。〕
雅夜の決意は固かった。

（ピンポーン）
「はーい。」
（ガチャッ）
「……雅夜。」
雅夜が行った先は……ひかりの家だった。
「雅夜、……何の用？」
「ひかり、お前に聞きたいことがある。」
「……な、何？」
「ひかり、……お前里枝美に何か言ったんじゃないか？」
「な、何も言ってないわよ……。」
「俺は……嘘つきはキライだ！」
「……。」
その場に一時沈黙が流れた。

「雅夜、……私は里枝美ちゃんのある重大な秘密を知ってしまったの……。」
「重大な秘密って何なんだよ？」
「それは言えないわ！」
「ひかりは……その秘密で里枝美を脅したのか？」
「……しょうがなかったのよ。私は雅夜のことが大好きなんだ

から。」
「だからって……、そんな卑怯なことをしていいのかよっ！！」
「だって里枝美ちゃんは！！……。」
「里枝美が何なんだよ！？」
「……。」
「何で黙り込むんだよ。」
「……言いたくないから。」
「何で言いたくないんだ？」
「このことを言ってしまったら……、雅夜が傷ついてしまうから……。」
「……そうか。これ以上聞いても何も教えてくれないんだな？」
「……うん。」
「そうか。……俺がひかりを傷つけてしまったな。ごめんな。」
「悪いのは私よ。私があんなことをしなければ、こんなことにならなかったのよ。」
「今日は悪かったな。……じゃあ、またな。」
「うん。……またね。」

雅夜は何も掴めなかった……。
だが、今回の出来事はいろんなことが起こっている気がすると感じていた。

日常

雅夜が里枝美と別れてからは、里枝美と付き合う前の今までの日常に戻った。
「雅夜、お前里枝美ちゃんと別れたらしいな？」
「……そのことには触れないでくれ。」
今話しかけてきたのは、俺の友達の咲弥。
何かと噂に敏感なやつだ。
「ふぅーん、噂はホントみたいだな。」
「悪かったな。」
「いやいや、雅夜は悪くねーよ。」
「咲弥、お前はホントに噂が好きなんだな。」
「好きだよ～。」
「ホントに嫌なやつだな。」
「時には噂も役にたつもんだぞ。」
「そうなのか？」
「ちなみに、里枝美ちゃんの噂もあるんだが……。聞いてみたいか？」
「……聞きたくない。」
「そうか、……結構お前の聞きたそうな噂だと思うんだけどなぁー。」
「……俺はその噂を聞いたほうがいいのか？」
「お前がまだ里枝美ちゃんのことを諦められないならな。」
「……教えてくれ。どんな噂なんだ？」
「その噂っていうのは……。」

この噂を聞いた雅夜は、いったいどうするのだろう？

噂

「咲弥……その噂って、どんな噂なんだ？」
「何日か前に、里枝美ちゃんが女の子と言い争ってたらしい。」
「それは本当なのか！？」
「噂なんだから、わかんねぇーよ。ただ……。」
「ただ……？ただ何なんだよ？」
「ただ、それを見たってやつがいるんだよ。」
「そいつは誰なんだ？」
「隣のクラスの篠田ってやつだ。」
「ちょっと聞いてきてみる！」
雅夜はその場からダッと駆け出した。
「雅夜っ、ちょっと待て……、行っちまったか。篠田がどんなやつか知らないくせに……。」

（ガラーっ）
隣の教室のドアが開くとともに1人の生徒が廊下に出てきた。
「あっ、君ちょっといいかな？」
「はい。何でしょうか？」
「君のクラスの篠田って人を呼んできてほしいんだけど。」
「何を言ってるんですか？篠田は僕ですよ。」
「君が篠田だったのか。悪かった。」
「別にいいですよ。あと、初対面なのに呼び捨てにしないでください。」
「すまなかった篠田君。俺は雅夜だ。」
「雅夜さん、僕に何の用なんですか？」
「実は君に聞きたいことがあるんだ。」
「僕に聞きたいこと？」

「君は、里枝美と女の子が言い争ってたのを見たらしいな。それは本当なのか？」
「ええ、見ましたよ。」
「その言い争ってた女の子は、どんな子だったんだ？」
「なぜ僕がタダで情報を教えなきゃならないんですか？」
「教えてくれたっていいじゃないか。」
「嫌ですよ。何も僕に利益がないじゃないですか。」
「……わかったよ。俺は何をすればいいんだ？」
「何をしてもらいましょうかねー……そうだ！３回回ってワンって言ってください。そしたら情報を教えてあげましょう。」
「……３回回ってワンって言えば、絶対に情報を教えてくれるんだな？」
「ええ、絶対に教えますよ。」
「……わかった。やってやるよ。」
（クルックルックルッ）
「ワン！」
「……雅夜、何やってるの？」
「里枝美！？こっ、これは、……ちょっとしたゲームなんだ！」
「そ、そうなんだ。じゃあまたね。」
「お、おう。またな。」
里枝美はその場から駆け足で去っていった。
「……篠田君、これでいいんだろ？」
「ええ、いいですよ。とてもおもしろかったです。」
「……それじゃあ、女の子の情報について教えてくれ。」
「その女の子は……。」
篠田君から女の子の情報をいろいろと教えてもらった雅夜は、１つの確信へと至った。
「篠田君、女の子の情報を教えてくれてありがとう。」
「いえいえ、こちらこそおもしろいものを見せてもらえましたから。」

「それじゃあ、また。」
「またの機会に。」

〔まさかとは思っていたが、女の子の正体はやっぱり……ひかりだったか。〕
女の子の正体がわかった雅夜。
そんな雅夜を待ち受けているのは、今まで以上につらい真実だとは、雅夜は知るよしもなかった。

明らかにしたい真実

雅夜はひかりと篠田君の証言から、ひかりと里枝美の関係性が確実なものであると確信していた。

[学校]

「里枝美、放課後ちょっと話したいことがあるんだけど、いいかな？」

「……それは重要なことなの？」

「俺にとっては重要なことだ。」

「……わかったわ。」

放課後になった。

「雅夜、重要な話って何？」

「……屋上で話しをしたときに里枝美は嘘をついたな？」

「……私、嘘なんかついてないよ。」

「ひかりは関係ないって言ったよな？」

「……言ったわよ。」

「ひかりに聞いたんだ……。」

「何を聞いたのよ？」

「里枝美が別れようって言い出したことに、ひかりは関係があったことだ。」

「ひかりちゃんが、嘘をついてるかもしれないじゃない？」

「ひかりが嘘をついて何の得になるんだよ？それにお前たちが言い争ってたところを見たってやつからも話を聞いた。」

「……あのときね。だからあんなことをしてたのね。」

「……。」

「サイテーね。」
「里枝美だって……サイテーだよ。里枝美は、俺に何かを隠してる。俺に話してくれたっていいじゃないか！」
「……イヤよ。」
「どうしてなんだ？」
「この秘密を話したら、雅夜に嫌われてしまうから……。」
「何も知らないままのほうが、俺は……つらい。」
里枝美は自分の心の中で葛藤を繰り返していた。
「……わかったわ。私の秘密について、……全部話すわ。」

里枝美の過去

「あれは、私がまだ幼かった頃……」

当時の里枝美はまだ5歳だった。
「里枝美、ちょっと話したいことがある。」
「お父さん、何の話？」
「実はな、お前にはこれからある訓練を受けてもらう。」
「訓練て、どういうことをするの？」
「簡単なことだよ。遊びみたいなもんだ。」
「わぁーい。里枝美、訓練やるっ。」
その日から、里枝美はある訓練をし始めた。
もちろん、当時の里枝美は幼かったから、何にも知らなかった。
訓練というものが、とても過酷なものだと知らずに……。
「お父さん、どうしてこんなことをやらないといけないの？」
「……お前が立派な大人になるためだよ。もう少し頑張れるな？」
「……うん。」
「お前には俺の後を継いでもらわないといけないからな。」
里枝美は5年間訓練をし続けた。
「お前はもう一人前だ。」
「私は……お父さんの後継ぎにはなれないわ。……いや、なりたくないわ。」
「今さら何を言っているんだ！」
「だって！」
「……もう引き返せないんだ。」
「……わかったわ。」
それから、里枝美の訓練の成果を示すために、お父さんから仕事が与えられた。

それはとても過酷なものであった。

「とても辛かったけど、私は仕事をしっかりとこなしたわ。」
「里枝美の仕事って……？」
「私のやってた仕事は……。」
里枝美は辛そうな表情を浮かべながら何かを考えていたが、意を決して事実を話すことにした。
「私は小さい頃から……暗殺者になる訓練を受けていたの。」
「えっ！！」

秘密を打ち明けてから

「えっ！……暗殺者！？」
「そう、私のお父さんは暗殺者だったの。私はその後継ぎにならされたの。」
雅夜には信じられなかった。
こんなにかわいくて優しい里枝美が、昔は暗殺者だったとは……。
「……今は暗殺なんてやってないんだよな？」
「……お父さんが逮捕されてからは、いろいろと事情聴取とかされてから、私は別の家の人に引き取られることになったの。私のお母さんは私が小さいときに死んで、私には頼る人がいなかったから。」
「……今の家族は、このことを知っているのか？」
「もちろん、知ってるわ。このことを知った上で、私を受け入れてくれたの。」
「そうだったのか。」
「この話を聞いて、私のことが嫌いになったでしょ？怖くなったでしょ？そりゃあそうよね。私はただの人殺しなんだからね。」
「そんなことねぇーよ！」
「そうに決まってるわ！」
「過去がどうであれ、里枝美は里枝美だろ？過去にとらわれずに、現在（いま）を生きていれば、それでいいじゃないか。」
「……過去は変えらないわ。」
「過去よりも大事なのは現在だ。」
「……雅夜ならそう言ってくれると思ってたわ。でも、もう遅いわ。」
「遅くなんてない！」
「……ありがとう、雅夜。」
（タッタッタッタッ……）
そう言い残して、里枝美は走り去ってしまった。

「待てよ！里枝美ぃーーっ！」
里枝美の姿が、雅夜からどんどんと遠ざかっていった。
「どうしてわかってくれないんだよ？……里枝美。」
雅夜は夕暮れの中、１人佇んでいた……。

彼女がいなくなった日常

次の日から里枝美は学校に来なくなった。
里枝美の家に行ったが、そこはもう空き家になっていた。
「雅夜、里枝美ちゃん……転校したんだってな。」
「……あぁ。」
「どこに転校したんだ？」
「……知らない。」
「……雅夜、お前だいぶ腑抜けたな。」
「……あぁ。」
「そんなんだから、里枝美ちゃんがお前から離れていくんだよ！」
「お前に何がわかる！」
「わかるさ。お前のことはよくわかる。何年親友やってると思ってんだよ？」
「……そうだよな。俺が悪かった。」
「俺も言いすぎた。ごめんな。……これからどうするんだ？」
「里枝美がどこに行ったかわからないから、どうすることもできない。」
「とりあえず、待つしかないってことか。」
「……そうだな。」

待っていても……

あれから1年が過ぎた。
1年経っても里枝美の行方は全くわからなかった。
雅夜はもう諦めていた。
もう二度と里枝美とは会えないと確信していた。
〔あれから1年か……。とっても長い1年だった。これから一生里枝美に会うことはないのかな……。〕
元気のない雅夜。
そんな雅夜を気遣う人がいた。
それは、ひかりだった。
「雅夜、1年経っても里枝美ちゃんのことが好きなの？……私じゃダメなの？」
「俺は……今でも里枝美のことが好きなのかもしれない。俺は今とっても弱りきっていて、頼りないやつだ。でも、こんな俺のことをひかりは支えてくれている。……こんな俺でも好きだって言えるのか？」
「私は今まで、雅夜以外の人を好きになったことなんて1度もないよ。どんな雅夜だって私は受け入れるよ。私は里枝美ちゃん以上の存在になってみせる！」
「……ひかり。」
「だから、私だけの雅夜でいて！」
「……わかった。これからもよろしくな。」
「うん！よろしくね☆」

2人目の彼女

ひかりは雅夜の彼女になった。
雅夜は、ひかりと付き合うことで、里枝美との過去を忘れようとしていたのだ。
「雅夜〜、どこかに遊びに行こうよ。どこに行きたい？」
「どこにしようかなぁ……、ひかりはどこに行きたいんだ？」
「雅夜と一緒ならどこでもいいよ。」
「そうか……、じゃあ映画でも見に行くか。」
「うん、そうしよう。」

［映画館］
「雅夜、何の映画を見る？」
「うーん、迷うなぁ〜。」
「こっちラブコメとかどうかな？面白そうじゃない？」
「そうだな。これにしよう。」

映画を見終わった雅夜とひかり。
「ラブコメのはずなのに、最後のシーンには感動しちゃった。」
「ひかり、号泣だったもんな。」
「あのシーンで泣かない方がおかしいよ。」
「確かにな……。」
「せっかく雅夜の泣くところが見れると思ったのに。」
「残念だったな。」
「まっ、いっか。次はどこに行く？」
「とりあえず、ご飯でも食べに行くか。」
「うん、じゃあ行こう。」

「さっきのファミレスのハンバーグ美味しかったね。」
「そうだな。また食べに行こうな。」
「今度は……私が作ったハンバーグを食べて。」
「ひかり……楽しみにしとく。さっき食べたハンバーグよりも美味しいのを作ってくれよ。」
「任せといて☆」
「じゃあ、そろそろ帰るか。」
「うん、そうしよう。」

[学校]
「雅夜、おはよー。」
「咲弥、おはよー。」
「あのさぁ～、俺また変な噂を聞いたんだけど……、聞きたいか？」
「どうせ、まったく役に立たない噂なんだろ？」
「そうだな。今の雅夜にとっては、どうでもいい噂なのかもしれないな……。このことは忘れてくれ。」
「それはどういうことだ？」
「言ったままの意味だが？気になるのか？」
「……。」
「気にならないなら、どうでもいいだろ？」
「俺に関係していることなのか？」
「あぁ、関係していることだ。」
「……教えてくれ。」
「……いいぞ。教えてやろう。」
「その噂ってのは、どんな噂なんだ？」
「実はな……里枝美ちゃんを見たっていうやつがいるんだ。」
「それって……まさか！？」
「そのまさかさ。」
「里枝美を見たやつってのは、……篠田君なんだろ？」
「そうだ、篠田だ。」

忘れられない想い

「篠田君、君に聞きたいことがあるんだけど……。」
「……里枝美さんのことですか？」
「あぁ、……そうだ。」
「里枝美さん見ましたよ。彼女の家の前でね。」
「そうか。……ということは里枝美はまだ近くにいるということだな？」
「そうなりますね。ところで、雅夜さんには彼女がいるんじゃないんですか？」
「……いるよ。」
「今の雅夜さんに里枝美さんの存在は必要なんですか？今の彼女はどうするんですか？」
「俺は……。」
「どうするんですか？」
「俺は……里枝美とちゃんと話がしたい。そして……里枝美との過去にケリをつける。今の彼女とは別れない。」
「ホントにそんなことができるんですか？」
「里枝美との過去にケリをつけないと、俺はこれ以上前に進めない……。」
「覚悟は決まっているんですね？」
「あぁ、覚悟はできてる。」
「……実は、雅夜さんと里枝美さんを会わせることができます。ただ、……。」
「何だよ？言ってくれ。」
「ただ、どのような状況や状態になっても、僕は何も責任はとりません。……いいですか？」
「あぁ、わかった。」
「会う日時と場所は明日連絡します。里枝美さんもいろいろと忙し

いみたいなので。」
「ありがとう。じゃあまた明日。」
「はい……また明日。」

会う前に……

「雅夜さん、会う日時が決まりました。」
「ホントか？それで、それはいつなんだ？」
「明後日の夜１１時だそうです。」
「なんでそんなに遅いんだ？」
「なるべく人目を避けたいからだそうです。」
「そうか。場所はどこなんだ？」
「いつもの公園だそうです。」
「あの公園か。わかった。」
「後悔しないようにしてください。」
「あぁ、わかった。ありがとう、篠田君。」
「いえ、別にいいですよ。」
「じゃあまたな。」
「では、また。」

里枝美との決別を明後日に控える雅夜は、明日このことをひかりに伝えることにした。

君のために

翌日。
雅夜はひかりに昨日のことを伝えた。
「雅夜は、里枝美ちゃんと会って決着をつけたいのね？」
「あぁ、そうだ。」
「元の関係に戻ることはないのね？」
「戻ることはない。」
「私は雅夜のことを信じてるから。」
「こんなにも俺のことを想ってくれてるひかりのことを裏切りたくない。だから、俺は里枝美とのことをちゃんと終わらせる。」
「……待ってるから。昔みたいに、雅夜が私のことを、純粋に好きって言ってくれることを。」
「そうだな。明日で里枝美とのことが全て終わる。そうすれば、俺の目にはひかりしか映らない。」
「雅夜、……またね。」
「じゃあ、またな。」

さよならを言わせて……

雅夜は公園へと向かっていた。
その間にいろいろと考えていた。
〔俺は、自分の想い・考えを里枝美に伝えることができるのだろうか？もし、里枝美に会うことで気持ちが変わってしまったら……、俺はどうするんだろう？〕
そんなことを考えているうちに、雅夜は公園に着いた。
公園には、ベンチに座る里枝美の姿があった。
里枝美は、１年前と変わらずにとても可愛かった。
「雅夜……久しぶりね。」
意外にも里枝美の方から声を掛けてきた。
「久しぶりだな……里枝美。」
「……今日言いたいことって何？」
「今日言いたいことってのは……お前がいなくなってから、変わってしまった俺の気持ちだ。」
「……。」
「俺は、お前のことがホントに好きだった。お前の秘密を知ったところで、俺の気持ちは変わることはなかった。だが、そんな俺のことを信用せずに、お前は俺の前から姿を消した。」
「別に信用してなかったわけじゃない！ただ、……雅夜の近くに居ることが辛かっただけ。私みたいな人殺しが、恋愛なんてしてはいけなかっのよ！」
「過去に何があっても、誰にでも恋愛をする権利はあるだろ？お前は、自分の過去から逃げてるだけだ！なぜ過去ばかりを振り返るんだ？なぜ前を見ようとしないんだ？」
「……。」
「いつまでも過去に囚われるな！」
「うぇ～ん、雅夜ぁ～。」

里枝美は急に大きな声で泣き出した。
俺は、そんな里枝美を抱きしめることしかできなかった。
「……やっぱり裏切るんだね。」
（……グサッ）
「うっ……。」
何か声が聞こえたかと思った瞬間に、俺は激しい痛みに襲われた。
「……いやぁーーー。」
里枝美が悲鳴を上げていた。
「……どうしてなんだ……ひかり？」
「どうしてって、雅夜が私を裏切ったからよ。私を裏切らないって言ったじゃない。それなのに、あなたは私を裏切った。だから、私はあなたを刺したのよ。」
「……俺は……。」
雅夜の目の前は真っ暗になった。

（……雅夜）
〔遠くで誰かが俺の名前を呼んでる気がする。〕
ゆっくりと雅夜の目が開かれた。
「雅夜ぁ～。よかったぁー。1週間も目を覚まさなかったから、もうダメなのかと思っちゃった。」
目の前には、涙ぐんだ里枝美がいた。
「俺……助かったのか？」
「私が携帯で病院にすぐに連絡したから助かったんだよ。あと少しでも連絡が遅くなってたら、死んでたかもしれないって言われたんだよ。」
「そうか……今、俺が生きているのは里枝美のおかげだな。」
「そういうこと。」
「ありがとな。ちょっとテレビを観ていいか？」

俺は急にテレビが観たくなったからテレビをつけた。
「次のニュースです。今日の朝、〇〇〇公園でバラバラにされた女性の遺体が見つかったそうです。身元はまだわかっていません。」
（プツン）
「おい里枝美、何でテレビを消すんだよ？……あの公園って、俺がひかりに刺された公園だよな？それに、バラバラにされた女性の遺体って……まさか！」
「……そうだよ。あの遺体は……ひかりちゃんだよ。……私が殺したの。」
「……どうして？」
「こうするしかなかったの……。雅夜……サヨナラ。」
（グサッ）

さよならを言わせて……（後書き）

今まで『俺の彼女は〇〇〇〇〇〇』を読んでくださった読者の皆様、
ありがとうございました！！
今回で完結です。
意外な展開で終わらせました。
自分でも予想外です。
次回作も、またよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8729k/

俺の彼女は○○○○○○

2010年11月18日23時34分発行